

Be Bop

ピ・パップ

Trio-San

鳥尾さん

1. ピ・パップ

Be Bop 〈D. Gillespie〉（7：26）

2. ブルー・モンク

Blue Monk 〈T. Monk〉（5：22）

3. フィルシー・マクナスティ

Filthy McNasty 〈H. Silver〉（3：56）

4. 時さえ忘れて

I Didn't Know What Time It Was 〈R. Rodgers〉（8：02）

5. マイルストーンズ

Milestones 〈M. Davis〉（12：30）

6. ニアネス・オブ・ユー

The Nearness Of You 〈H. Carmichael〉（7：39）

7. 晴れた日に永遠が見える

On A Clear Day 〈B. Lane〉（8：41）

8. 縁は異なるもの

What A Diff'rence A Day Made 〈A. Adams, M. Grever〉（8：22）

中島弘恵 Hiroe Nakashima 〈piano〉

伊東里栄子 Rieko Ito 〈bass〉

安永春美 Harumi Yasunaga 〈drums〉

録音：2004年3月7日 東京

© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara .
Recorded at Greenbird in Tokyo on March 7, 200
Engineered by Satoru Kawaguchi.
Mixed and Mastered by
Venus 24bit Hyper Magnum Sound：Tetsuo Hara.
Photos by Shinichi Takahashi.
Designed by Taz.

安永春美（ドラム）は福岡県出身。学部は障害児教育学科。小学の時にピアノとエレクトーンを始める。中学のプラス・バンド部ではサックスを演奏した。好きなドラマーはジミー・コブ、フィリー・ジョー・ジョーンズ、ルイス・ヘイズなど。「ジャズ研に入ったとき、“ドラムがないからやらないか”といわれて、いい経験になると思ったので始めました。最近になって自分にできることや足りないものがかかってきました。それまではそれさえもわからなかったんです。演奏中にこんなふうにやりたいとひらめいたことがやれたときはすごくうれしい。ジャズは人間性が出るところ がいいですね」(安永)

鳥尾さんが結成されて、2004年で5年目になる。大学の定期演奏会で行なわれたデビュー・ライブのとき、鳥尾さんはレッド・ガーランドの「フォギー・デイ」を完全コピーして出演した。ベースとドラムはこの楽器を手にしてまだ1年足らずだったわけだが、元よりピアノなどの楽器に親しんでおり、また音楽センスにも優れていたから習得に時間はかからなかったのだろう。音楽的な基礎と才能を持っていれば、ジャズといえどもそんなに困難な音楽ではないはずだ。

そして、鳥尾さんがライブ・ハウスで初めて演奏したのは2001年1月、場所は渋谷の“スピーク”だった。当時、毎週出演しているので、鳥尾さんのジャズはその頃飛躍的に進歩したのだろう。「女のコばかりのピアノ・トリオがいる」「本格的なピパップをやっている」そんな噂が広まりはじめ、ヴィーナスレコードの原哲夫プロデューサーの

耳にも入る。原プロデューサーは半信半疑の思いでジャズ・クラブへ出かけたところ、すぐに鳥尾さんのレコーディングを決めたという。知られるとおり、ヴィーナスレコードはストレートアヘッド・ジャズのピアノ・トリオ・アルバム制作において近年熱い注目を浴びており、高い人気と評価を得ている。そのヴィーナスから鳥尾さんがアルバム・デビューを果たすのは自然で運命的な流れといえるかもしれない。鳥尾さんにとって望ましいタイミングで、望ましい出会いが実現したことになる。

デビュー・アルバム『ピ・パップ』には、鳥尾さんのふだんのレパトリーが収録された。ディジー・ガレスピーの「ピパップ」、マイルス・デイビスの「マイルストーンズ」、ピパップ/ハードバップの数々の名演が残されているスタンダード・ナンバー「オン・ア・クリア・デイ」「時さえ忘れて」「縁は異なるもの」「ブルー・モンク」、「フィルシー・マクナスティ」、「ニアネス・オブ・ユー」の8曲が取りあげられている。

前述したように、10分前後の演奏時間でもまったく長さを感じさせないのはすごいというよりほかない。ピアノ・トリオに一体感があり、勢いやグルーブがなくなることがない。そのことを伝えると、「勢いだけでやっています」と、中島は謙遜する。「三人でやってきた時間が長いから、自然と気持ちがかよい合うのでしょうね。ジャズには音楽的なことよりも、そういう気持ちや精神的な部分がとても大事だと思います」。また、鳥尾さんが勢いに乗ったときのパワフルなノリは、近年の4ビート・ジャズではあまり見られないものだ。「“バンドをやる”といえば、ロックのイメージがありますよね。ロックのようなつもりでジャズをやっているのかもしれませんが」と中島は語った。

彼女たちが敬愛するグルーブのひとつ、ウイントン・ケリー・トリオも乗ったときの勢いはすごいものがあった。ケリーはR&Bからジャズへ転向した。歴史をふり返れば、パワフルなノリを持つジャズ・ミュージシャンには、R&B出身者が実に多い。私見だが、R&B的なノリのよさと4ビートが合体したとき、パワフルなグルーブが生まれる。鳥尾さんのジャズが持つパワフルなノリにも同じようなことがいえるかもしれない。また、彼女たちは「昔のジャズは、今聴いても新鮮なのが不思議」と語っているが、彼女たちのジャズも新鮮である。思うに、ジャズを聴いて新鮮に感じる演奏者の感性こそが、新鮮なジャズを生むような気がする。今から約半世紀前、ブルーノートのアルフレッド・ライオンは、ドイツからやって来た女流ピアニスト、ユタ・ヒップに感動してレコーディングを行なった。彼女のアルバムは女性アーティストによるハードバップの名盤として聴き継がれている。ヴィーナスレコードの原哲夫プロデューサーのよるこびはそのライオンを上回っているに違いない。ピアニストのみならず、鳥尾さんという三人の優れた女流アーティストと一度に出会えてしまったからである。

（高井信成）

女性ばかりのピアノ・トリオ“鳥尾さん”がアルバム・デビューを飾った。ユニークなバンド名を持つこのピアノ・トリオは、バリバリのピバップ&ハードバップを聴かせる本格派である。若い女性ばかりのメンバーでピバップをやるのはめずらしいわけだが、何よりも彼女たちのジャズの素晴らしさが注目される。彼女たち演奏は借り物ではない。自分たちのジャズを演奏している。1曲の演奏時間が10分を軽く越えても長さをまったく感じさせない力量はすごい。ライブでは1曲が20分を越すこともあるが、それでも集中力と勢いが落ちないのには驚いてしまう。表現の欲求が途切れることなく湧き起こってくるようだ。こういうピアノ・トリオは世界的にみても少ない。日本で誕生したことを誇りに思えるグループだ。

鳥尾さんのメンバーは、中島弘恵（ピアノ）、伊東里栄子（ベース）、安永春美（ドラム）。1999年春に東京学芸大学のジャズ研究会で誕生し、2002年に卒業後は東京都内のジャズ・クラブで活動してきた。まず最初に興味を引くのはユニークなバンド名だが、それについて中島はこう語っている。彼女はパンマスのな役割を担当している。「バンド名を考えることになったとき、突然“鳥尾さん”という漢字とともにひらめいたんです。鳥尾はピアノ・トリオのトリオだし、“鳥”からチャーリー・パーカーのニックネーム“バード”を連想することもできる。これしかない!と思いました女性らしい面白いネーミングだ。ちなみに、鳥尾という名前の友人知人がいたわけではないらしい。鳥尾さんの三人は同じ学年、ジャズ研に入学してしばらく経った大学2年の春に結成された。同学年に男性のドラマーがいなかったことなどから、偶然女性ばかりのピアノ・トリオになったという。伊東はベースを、安永はドラムを、ジャズ研に入ってから始めた。三人それぞれのプロフィールを紹介しよう。

中島弘恵（ピアノ）は福岡県出身。学部は小学校教員養成課程音楽科。4歳からピアノを始めた。好きなピアニストはウイントン・ケリー、ソニー・クラーク、フィニアス・ニューボーンJr.など。ジャズ以外では洋楽全般を聴いてきた。「ジャズは50年以上も前に録音されたものでも新鮮で、聴くときいつもワクワクしてくる。私はジャズ・ピアノで歌いたい。うまく歌えないときはもんもんしていますが、歌があふれ出てくるときはすごくうれしいです」(中島)

伊東里栄子（ベース）は東京都出身。学部は小学校教員養成課程数学専修。好きなベーシストはポール・チェンバース、サム・ジョーンズ、ジミー・ギャリソンなど。4歳からピアノの個人レッスンを受けた。高校の時はフュージョン・バンドでピアノ/キーボードを担当。現在、昼間は中学の非常勤教師の顔も持つ。「高校の頃はバット・メセニーと矢野顕子が好きでした。大学でベースを始めてからピバップのほうが好きになったんです。4ビートのベースは、最初はウォーキングや同じコードでいるんな演奏ができることが面白かったのですが、最近はタイミングやリズム、音の質などが全体に影響を与えることに興味を持っています」(伊東)